

看護過程展開の理解度に関する実態調査 ～実習前後の自己評価から～

○蔭谷 陽子, 大塚 眞代, 堀 理江, 永谷 温幸, 高岡 宏一 (関西福祉大学看護学部)

I. 研究目的

看護基礎教育における看護実践能力の育成については、医療・教育・学生の現状と課題を背景に実践と思考を連動させた効果的な教育のあり方(厚生労働省, 2011)や、ヒューマンケアに必要な看護や人への興味・関心, 学士力を培うための対話力, 自学力を基盤としたコアカリキュラムが提示されている(日本看護系大学協議会, 2018)。それを受けて、講義・演習・実習をという様々な教育方法を有機的に組み合わせ合わせた授業を展開している。先行研究では看護過程を学ぶ重要性(井下, 2000)や演習や実習による問題解決能力の向上といった教育成果が報告され(香川・櫻井, 2007)、学生の学習過程の実態を把握することは教授活動の評価を行う上でも意義があると考えた。

本研究では、学生の主体的な学習態度が実習前後の看護過程展開の理解度に及ぼす影響を学生の自己評価から明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査時期・対象者：各論実習前の2017年9月と、2018年2月に無記名自記式質問紙調査を実施した。対象者は、A大学3年次生88名で、実習前質問紙回答者28名(回収率31.82%)、実習後質問紙調査回答者45名(回収率51.14%)を分析対象とした。

2. 質問紙の構成：「看護への興味, 関心をもつ」「他者と関係性を築くためのコミュニケーションがとれる」「主体的な学習(適切な資料を探す・調べる)」の実習や学内演習で必要とされる態度に関する3項目と看護過程の理解と実践に関する11項目である。回答はすべて1-4の4件法(1:指導を受けてもできない, 2:指導を受けても難しい, 3:少しの指導でできる, 4:指導がなくてもできる)で統一した。

本研究は、関西福祉大学看護学部看護研究倫理審査委員会の承認(承認番号 第29-0703号)を得て実施した。

III. 結果及び考察

「看護への興味, 関心をもつ」「他者と関係性を築くためのコミュニケーションがとれる」「主体的な学習」の3変数と看護過程の理解と実践の関連を検討した。実習前は、「看護への興味, 関心をもつ」の自己評価が高くなれば「他者と関係性を築くためのコミュニケーションがとれる」の自己評価が高くなることがわかった。実習後は、「主体的な学習」の自己評価が高くなれば看護過程の理解と実践の自己評価が高くなることがわかった。独立変数を主体的な学習態度に関する3変数それぞれの平均得点, 従属変数を看護過程の理解と実践の平均得点とし、実習前と実習後それぞれで重回帰分析を行った。結果、実習前では主体的な学習態度に関する3変数は看護過程の理解と実践には関連せず、実習後において、「主体的な学習」は看護過程の理解と実践に正の関連($\beta = .324, p < .05$)を示した。「看護への興味, 関心をもつ」と「他者と関係性を築くためのコミュニケーションがとれる」の2つの変数は、看護過程の理解と実践には関連していなかった。

実習前の紙上事例では、適切な資料を用いて看護過程の展開を行うまでには至らなかったのではないかと推察する。実習において患者との直接的な関わりにより看護の評価を得ることで、主体的な学習が看護過程の理解と実践につながると学生自身が認識し、主体的に学習することの重要性の気づきにつながったのではないかと考えられる。